

## 錯綜する愛と教育・・・

『親の理想通りの子供に育てる。しかしその子供は、絶対に親の言う通りにはならないと言う。何はともあれ親の姿を見て子は育つ…。』詰まるところ、ここに落ち着くのではないでしょうか？

子育てで悩む、若いお母さんが急増している昨今ですが、私は思う：本当は、どう教えるかという問題ではなく、親の姿を見て、子供は育つ。これは当たり前と言えば当たり前前の事ですよ。

ところが、今はその規範になるような父親像、母親像に意識を持っていく親御さんが少なくなつた様な気がします。やはり親の人生を歩む姿、その暮らし方そのものが、理屈ではなく、子育てそのものだと思います。

子供には、みじめな思いはさせたくない、子供の個性を伸ばしたい等々、親が子供の多様性・主体性を尊重するのは良いのですが、それは何が正しくて何が誤りかを教わってからの話です。子供が何も分からないうちに、親が『転ばぬ先の杖』になり、全ての判断を任せてしまうから、判断力のない子供が増えて、好き勝手な事をやってしまうのではないのでしょうか？「我が儘」と「自由」は違います。「ケジメ」ある生活の中で、「自由」にさせる中に、本当の個性

が芽生えるのではないのでしょうか？

子供に、ケジメある生活の中で自由にさせる事で、その中で子供がある時、あるチャンスにおいて、ある感動を持つて、自分の進むべき道を見つける事と思えます。そして自由の中で、自身から自らの進む道を選択する時に、本当の個性というものが、生まれてくるのではないかと思えます。

ボタンを押せば何でも出てくるし、お金を出せば何でも買える現代です。「便利で快適」になることは素晴らしい事ですが、「便利」という名の下に、何もかも満たされていくと、大自然の恩恵を感じる事が出来なくなりそうです。

「かわいい子には旅をさせよ」あるいは、「若い頃の苦労はお金を出してでも買え」と言いますが、子供達にわざわざ苦しい思いをさせたくない気持ちも分かりますが、本当に我が子が可愛いなら、「ケジメ」ある態度を見せ、「ケジメ」ある生活をさせる事が、「感動」を知る素敵な大人へと成長させるのではないのでしょうか？

また、そういう感動を味わえない子供達をもつと残酷だと思います。

その子を思う厳しい心の裏には、表面的な体裁を気にした愛情には無い、「無償の愛情」(見返りを求めない愛情)が含まれています。親のその「無償の愛情」には、子供の為ならどんな犠牲をも厭わないという強い精神が宿ります。本当に尊い愛情というものは、必ず犠牲を伴います。大人同士でも、人を愛したら必ず犠牲は伴つてく

るでしょう？厳しさと愛、その両方が相まったものでなければ本物ではありません。ただの親の独りよがりになり下がってしまいます。

ここで『教育』という言葉の辞書で引くと、「知識や技術を教えること」とあります。しかし教育(エデュケーション)の語源はラテン語のエデュカレ、つまり引き出すことです。広く浅く、たくさん知識を教えるのではなく、子供が本来持っている豊かな資質や能力を、それに相応しい環境を与えることで引き出すとするのが教育の本義なのです。

私の親友に、デビットというアメリカはロサンゼルスに住むユダヤ人がいますが、彼は自分がユダヤ人である事に、心からその誇りと自信をもっていきます。それもその筈、ユダヤ人と言えば、ノーベル賞の45%(現在までの受賞者270人中、121人がユダヤ人)、アメリカの大学院の29%をユダヤ人が占めるのも、その秘密はユダヤの優れた教育にあるのではないかと思っています。

ユダヤの教育は3才から始まります。教えるのは知識ではなく、5千年という長い民族の歴史の中で培われた、生きるための智慧です。

「あなたはこの世の中を良くするために生まれてきた。そしてお父さん、お母さんがユダヤ民族の中から1人の子供を授けた。だからあなたを夢、志の大きな子に育てる義務があるのだ」と。この様な意識を小さな子供の頃

に植え付け、そして植え付けられるわけです。事実デビットの両親はじめ祖父や親戚に至るまで、みな何らかの会社の社長だったり、デビットの父親に関しては、ハーバード大学の大学院で博士号を取得した後、ある2社の会社社長を歴任し、現在ではスベイスシャトルの特殊開発部隊に国を代表して選出されている天才です。

『天才』とは、「天」から授けた何らかの「才」能の事ではないでしょうか？その才能を摘まねずに伸ばすことが出来た子供が天才と呼ばれているのではないかと思えます。つまりどの子も生まれた時は天才の芽をちゃんと持っているのです。人間の賢愚善悪は大概父母の教えによるものです。その教えというのは言葉ではなく正しい行いにあります。

子供にとって、特に母の存在は偉大です。お母さんがいつも「まだしてないの？早くしなさい・あなたはいくも出来ないんだから：〇〇君を見習いなさいとか」等というのは、子供にとっては全て理不尽な命令にしか聞こえてこないものと思えます。これを「骨折りの損のくたびれもうけ」と言うのです。その子にとってマイナスの命令ばかりでは、子供の心が病んでしまうのも当然です。終いにはキレる子供に育つ可能性ががあります。子供は親の言う理想通りはなりません。むしろ、子供は親のする通りになるものです。偏食の子供に何百回「野菜を食べな

さい」と促すよりも、親が美味しそ  
うに食べている姿を見せる方がずつ  
とずつと効果があると思います。

『偉人の陰に母の力有り。』

——平和で健全な世の中が実現する  
事を祈って——

副住職 谷川 寛敬

